

怪獣と拉致

松浪丞

子供の頃の記憶といたら、なんといっても夏休みだろう。勉強なんか放り出して遊びほうけた。山や野原で昆虫採集、海辺でバーベキューや花火大会。冷たい西瓜やアイスを食べすぎて、腹を壊して寝込んだのも、ホロ苦い夏の思い出の一コマだ。

野山を駆け回るのも好きだったが、家で自堕落にテレビを見て過ごすことも多かった。仲間に怪獣番組や特撮に詳しいのがいて、いろいろと解説してくれた。着ぐるみの中に入る役者は、暑さと息苦しさのために、五分ともたないんだぜ、と。そんな話を聞くと、子供向けの夏休み特集も、なんとなくなってしまうのだった。

仲間が貸してくれたポケット怪獣図鑑を手に、サンダルを引っかけて広場へいった。花壇の横を通り過ぎると、近所の高校生のお兄さんが、ベンチにかけて英語のテキストをめくっていた。黒縁の眼鏡をかけた外したりしながら、「部屋にいても集中できないが、表に出てもやる気が起こらない」などとぶつぶつ言いながら、池の噴水を眺めていた。

私の姿に気付くと笑顔で頷き、横にきてベンチにかけるよう促した。当時まだ十才くらいだったので、年上の高校生がとて大人びて見えた。思わずポケット図鑑を後ろに隠そうとしたが、彼はほほえみながら相手をしてくれた。年長者に接した訳でもあるまいが、私はふと怪獣番組の疑問点をぶつけてみた。

「なぜ地球防衛軍じゃなくて、科学特捜隊とかウルトラ警備隊なんですか？」

するとお兄さん（佐藤という名だった）は、間髪を容れず次のように答えてくれた。

「日本は、憲法で軍隊の保有を禁じられているからね。それで自衛隊にならって、特捜隊や警備隊になってしまっただろうなあ」

スジの通ったその説明には、正直なところ驚かされた。さすがに高校生ともなると、相手が子供でも納得するように教えてくれるのかと、感心するばかりだった。尊敬の眼差しを向けられてにっこりとする佐藤さんだった。

すこし考えてから、私は自分でも思いもかけない質問をした。

「じゃあ怪獣とか宇宙人は、なにか根拠でもあるのですか？」

佐藤さんは眉根を寄せて神妙な顔をした。それから私の方をちらりと見ると、徐に口を開いた。

「うん、いい質問だね」と彼は言葉を区切るように言った。「じつはあれは、○連や○国

などの、共産主義の脅威を表わしているんだ」

会話はあくまで穏やかだったが、私の心は動揺した。

「ええっ、そうなんですか」

たかが子供向けの特撮番組なのに、佐藤さんにかかる東の冷戦構造の対決や、国際的な安全保障の問題にまで発展するのだった。そして止めの一撃はというと、宇宙ヒーローの正体は、在日アメリカ軍なのだそう。共産主義のイデオロギーが、怪獣や凶悪な宇宙人に姿を変えて侵略してくると、在日米軍は正義のパンチをあげて撃退するという構図だ。必殺のレーザー光線が、戦術核や迎撃ミサイルであることはいまでもない。

どの番組の何話目だったかは失念したが、こんなのがあった。太陽系外の惑星で、高度な文明を築いた知的生命体があった。しかし、テクノロジーは進歩したが、遺伝子は退化してしまい、種の存続がおぼつかなくなった。そこで地球人を誘拐し、若い生命力を奪うといった内容だった。生命力を吸い取られた人間の、も抜けの殻になってしまふ場面が、やけにシユールだった。最後は科学警備隊と宇宙ヒーローが救出するのだが、テレビを見たあと夜歩きするのが怖かったのを覚えている。

ところがこれと非常に酷似した事件が、私の居住する地域からさほど離れていない市で発生した。下校途中の女学生や、海岸を散策する若い男女が、某国の工作員によって国外へ連れ去られたのだ。続発する誘拐事件に、住民の恐怖と不安は頂点に達した。助けを求めて警察へ駆け込んだ。しかし、話しを聞く警察官の態度はなぜか冷淡であり、その対応も不可解だった。必死になって訴えても、なかなか動こうとしなかった。あげくのはてには、「行方不明なら裁判所に失踪宣告を出してもらったらどうです」などと言いつつ始末だった。

当時の県警幹部のコメントは次のようなものだった。

「某国の狙いはなりません。名前や戸籍のデータ収集がメインである。現実の拉致などありえない。第一そんなことをしたら国際的な非難をあびるではないか」

のちに発言を修正したり、謝罪の記者会見を開いたりしたが、犯罪を未然に防止できなかった事実は変えようがない。年に数兆円の予算を計上している自衛隊も、最新の装備を導入している海上保安庁も、某国の工作員の活動を阻止することはできなかったのだ。

被害者の家族は「拉致被害者を連れ戻す会」を結成して広く市民に訴えているが、いまひとつ盛り上がりには欠けるようだ。政治家の反応も鈍く、解決にはなお時間がかかりそうだ。防衛費の増額や国民負担のあり方方には熱弁をふるうが、外国資本による土地や不動産の買い占めには関心がないのか、それとも意図的に避けているのか、議論を深めようとはしない。

国の財産と人の生命を守るには、どうすればいいのだろうか。我々にできることは何なのだろう。いまも帰国を果たせず、自由を奪われている人がいることを思うと、胸に怒りと涙がこみ上げてくる。